

米本和広

Yonemoto Kazuhiro

楽園

ヤマギン会  
という悲劇

洗脳  
の



洋泉社

樂園

米本

Yonemoto

洋泉社

江藤 弘

Kazuhiro

蔵

ヤフヤ  
という悲劇

下

洗腦の

洗脳の楽園

目次

プロローグ 僕なんか死ねばいいんだ

第一章 地上の楽園

第二章 脱走する子どもたち

第三章 交わることのない△△の真実

第四章 脳を洗う（四月二八日～二九日）

第五章 脳を洗う（四月三〇日～五月五日）

第六章 脳を洗った八十八人のその後

第七章 脳に浮かんだユートピア

239

第八章 「地上の楽園」の実態

267

第九章 ユートピアの終着点

289

エピローグ 重い十字架

321

ヤマガシ実顕地での事故一覧表

328

あとがき

330



# 洗脳の楽園

『ヤマギシ会という悲劇』





この本を

重い十字架を背負って

これからの人生を生きていかなければならない

健二君の父母に捧げる



# 僕なんか死ねばいいんだ

その突然の電話に、一瞬、私の身体がこわばった。

「うちのクラスの子が飛び下り自殺をしようとしたのです！」

緊張した電話の声は、埼玉県のある小学校に勤務する女性教師からだった。私が書いたヤマギシ会に関する記事を見て電話してきたのだという。(注二)

彼女が受け持つ三年生のクラスにその子が行ってきたのは九六年の一月、三学期の初めのことだった。最初から様子がおかしかったが、次第に手がつけられなくなった。彼女はそれまでも不登校、学習障害、いじめなどさまざまな問題を抱えた子どもを扱ってきた。だが、その子はこれまで見たことがないような多重人格的症状を示したというのである。

彼女は問題行動に至る原因や背景をいろいろ調べてみたが、はつきりとはわからなかった。消去法で探っていくと、転校してくる前にその子が預けられていたという「ヤマギシ会」の施設以外に原因は考えられなかった。

「その施設で何かがあったのではないか」

彼女はこう推測し、私に電話してきたのだ。

「ヤマギシ会とはいったいどんな団体なのでしょうか」

しばらくして、思春期の青少年が専門の精神科医の山登敬之と一緒に、喫茶店で会うことになった。女性教師はカバンに資料を用意してきていた。

彼女の証言は衝撃的だった。

その子の名前を仮に健二としよう。

健二は五歳のときに、「ヤマギシズム学園」（以下、ヤマギシ学園）と呼ばれるヤマギシ会の施設に預けられた。三年八カ月ほどそこで育てられ、九五年の暮れ、小学校三年生の二期末に親のもとに戻ってきた。戻るというより、施設に順応しないため帰されたと言ったほうが正しいようだ。約二週間家に閉じ込もっていたあと、健二は彼女のクラスにやってきた。とても背の低い子だった。

登校してしばらくはそれほど問題は起こさなかった。と言っても、それは後の行動と比較してのことであり、授業中は椅子に座らず立ち歩いていることが多かった。「お腹が痛い」「気持ちが悪い」と訴えてはよく保健室に行った。保健室ではいつも、ベッドの端っこで壁に寄り添うようにして、両手で膝を抱きかかえ小さく丸まって寝た。その様子から養護教諭は担任の女性教師に「この子は何かおかしい」と報告した。

健二は次第に攻撃的になっていった。悪口を言っては友だちを泣かす。身体の弱い子をついたり殴ったりする。担任の彼女が注意すると、興奮しながら「僕が死ななければ、みんな幸せになれないんだ!」と意味不明の言葉を口にした。落ち着きを取り戻すと、赤ちゃんと戻ったようになって、彼女にオンブやダッコをせがんだ。

給食時間になると、生徒たちは当番の指示に従って順番に自分の皿に料理を盛りつける。

ところが、ある日、健二は順番に関係なく真っ先によそおうとした。当番が「まだ呼んでないよ」と注意すると、とたんに人が変わったようになって、お盆を投げ出し、教室の窓から飛び出した。担任の彼女はあわてて追いかけて、連れ戻した。こうした行為は何度か繰り返された。

「これはいったい何なのか。何の意思表示なのか」

彼女は次第に健二に多くの時間を割かざるを得ないようになっていった。

健二の小学校では歯磨きの時間がある。あるとき、健二は歯ブラシを一人の子に突き刺すようにした。その子は驚いて「健二くん、やめてよ」と抗議したところ、健二はその子を殴りつけ、首を締め、床に張り倒した。わずかに数秒間の出来事だったという。

「私はその頃、健二くんの後をつけるように監視していました。そうしなければ、教室はメチャクチャになるような状態でしたから。そのときも後をつけていました。健二くんが歯磨きを終え、教室に入っていくのを見てからわずかに数秒後のことでした。教室の中から突然泣き叫ぶ声が聞こえたので、あわてて駆けつけたところ、床に倒れて泣いているその子の髪の毛を、健二くんが引っ張っていた。ふつうなら、相手が泣けばそれ以上のことはしないものです。健二くんはとことんまでやる。まるでヤクザがあつという間に相手をやつつけるような感じで、とても小三の子どもの仕事（わざ）とは思えませんでした」

そこまで話してから教師はココアのカップを脇に寄せ、テーブルの上に健二が描いた絵を広げた。

そこに描かれた人々の顔は、笑顔は一つもなく、いずれも歯が剥むき出しになっていた。歯は牙のように尖っており、まるで鬼のようである。最近の絵になると、人の口は閉じるよう

になっているが、それでもにこやかな顔つきの人は一人もいない。「人の口が閉じるようになってからは、問題行動を起こす頻度は大幅に減りましたが、恐ろしい顔つきの絵を描いていた頃、そうですね、学校にやってきた小三の三学期から小四の夏までかな、問題を起こさない日はありませんでした」と女性教師は言う。

ふだんはスピーチがうまく、教師の言葉への反応は早い。彼女の観察によれば頭のいい子である。各種の性格診断や知能テストでも異常は認められなかった。ところが、いったん健二の「何か」に触れると、人が変わったようになって、興奮しパニックに陥る。そうなる手がつけられないほど暴れた。自分の頭をコンクリートにぶつけ、ひどいときにはそれが一日に二回にも及んだこともある。彫刻刀で自分の手を傷つけたことさえあった。

健二はこんなことでもパニックに陥った。

学年交流を目的とした給食会がランチルームで開かれたときのことだ。ふだんは使わないので、ランチルームは微かひくさい臭いがするという。健二は部屋に入るなり、物凄い形相で窓のほうに駆け出し、そこから飛び下りようとした。担任の女性教師があわてて止めると、「知らない部屋は嫌なんだ」「臭いところは嫌なんだ」「教室に戻りたい」と泣きじゃくった。こんな衝動に走らせるほど、知らない部屋・臭い部屋は健二の「何か」に触れるようであった。

パニックになると決まって口にする「死」の発言は、日常的な場面でも見られた。交通安全の授業のときには、「健二は車に跳ねられ、死んでしまいました」という感想文を書いている。次の作文は、太平洋戦争のときのことを綴ったものだ。リズム感のあるしっかりした文章だが、破滅指向型である。

「あのせんそうがもどってくるでしょう。B 29 が日本にきてしまういだんをおとってくる。あの音はすごい。もえる町。やかれる町。家はやかれて消える。そして日本は消えるでしょう。いやまだわからない。日本はおわるのか。きえるのかわからない。日本がおわるかわからないし、ちきゅうがおわるかわからない」

女性教師を震え上がらせた健二の自殺未遂は、小四になったばかりの頃に起きた。

健二はある日、階段の踊り場で松葉杖の子をつついた。その子が「先生に言うよ」と注意すると、健二は突然階段の手すりを乗り越え、飛び下りようとしたのである。身体半分以上が逆さまになったとき、偶然そばに居合わせた教師がとっさに足をつかまえ、引き上げた。そのまま落ちていれば、大怪我をしていたか、打ちどころが悪ければ死んでいただろう。健二は泣きながら「死んだほうがいいんだ」「死んだほうがましなんだ」とうわごとのように繰り返していたという。

溜め息をつきながら、女性教師が話す。

「最初は『てめえぶつ殺すぞ』。それから『死んでやる』。次に『僕が悪いんだ』と言って、頭をコンクリートにぶつける。そして最後には私の胸をまさぐったり、ダッコ、オンブと赤ちゃんのように甘えるのです。まるで多重人格みたい。最近では回数は減りましたが、こんなことの繰り返しでした」

教師の証言を聞きながら、私は性的虐待を受けた子どもの記録『シーラという子』（早川書房）を思い出した。

教育心理学者のトリイ・L・ヘイデンが受け持っていた教室は、どの施設でも引き受け手のないような問題児を扱っていた。そこにある日、幼児を焼き殺そうとして警察に捕まった

シーラがやってきた。教室でも手に負えないほどの問題行動を散々繰り返した。だが、次第にトリイの献身的な愛情を受け入れるようになり、問題行動の原因が幼児期に受けた性的虐待にあることがわかった。トリイは裁判所を含め周囲を説得し、シーラを専門の収容施設に送るのを阻止した。やがて、シーラは固く閉ざした心をトリイに開き、二人は深い信頼の絆で結ばれていく……。

そんな記録文だったが、悪戦苦闘しながら一人の教え子にきちんと向き合っている目の前の女性教師が、一瞬トリイと二重写しになって見えたのである。

当初、健二はヤマギシ学園のことをまったく話さなかった。だが、シーラがトリイに次第に心を開いたように、とぎれとぎれの断片でしかないが、健二も思い出を口にするようになった。

「ヤマギシでは上級生に首をしめられたり、ぶっ殺す、と脅された。いつもいつもいじめられていた」

「六年生に首を締められたんだよ」

「お腹が痛くても、病院に連れていってくれなかった」

「宿題ができないと、(施設の)廊下に正座させられたんだ」

「世話係(学園の担当者)がものすごく怖かった」

「親しい友だち同士で話をするときは、『俺たちは親から捨てられた子』と言っていたんだ」  
自殺を企てた健二の親はいいたい、どう感じているのか。そのことを口にする、教師の顔は暗くなった。

授業参観のあとで、両親を校長室に呼び、ひととおりの経過を説明したが、母親は動揺し



た素振りを見せず、平然とした態度で、こう話したという。

「ヤマギシでのびのび育ち、自分で自分を見つめられるようになって欲しいと願って、ヤマギシに入れたのです。ヤマギシに入れたことをもって、親の愛情不足と思われるのは困ります」(健二が) 飛び下りてもいいし、死んでも構いません。家の中でも、そんなに死にたいのなら死ねばいいと言っています。あの子はみんなの気を引こうとしただけなのです」

近くにいた教師が食い止めていなかったら、わが子は確実に怪我をしていたか、死んでいたというのに、である。「学校で自殺した場合」健二くんの最初の亡骸を見るのは私なんですから……もつと真剣に考えて欲しい」と彼女は泣きながら訴えたが、母親の能面のような顔つきは最後まで変わらなかった。そばにいた父親はあまり話そうとせず、影の薄い存在だったという。

精神科医の山登敬之の診断はこういうものだった。

「ヤマギシに入るまでの健二くんのがわからないから何とも言えませんが、もともとのベース(素質)に何らかのヤマギシでの体験が加わって、問題行動を起こすようになったのではないのでしょうか。話を聞いた限りではPTSD(ポスト・トラウマティック・ストレス・デイスオーダー)心的外傷後ストレス障害)のように思えます」

阪神・淡路大震災のときに話題になったPTSDはいったん、心に大きな傷を受けると、それがあとあとまで影響し、興奮や攻撃的な感情表出、驚愕反応、あるいは感情狭窄や閉じ込めなどの症状を起こす精神障害のことだ。

健二にはもともと問題行動を起こすような先天的な素因があったのか、それともヤマギシで心に傷を受けるような体験を強いられたのか、あるいはその両方が重なり合ったのか。